

目次

I. はじめに.....	1
II. 研究の概要.....	2
III. 訪問看護師の重症心身障害児に対する遊びの認識と実践.....	3
IV. 心と身体に働きかける遊び.....	6
V. 子どものサインの読み取り.....	15
VI. 遊びの選択と調整.....	18
VII. 母親と子どもとのつながりをつくるコミュニケーション技術.....	21
終わりに.....	26



IV. 心と身体に働きかける遊び

訪問看護師が重症心身障害児に対して実施する遊びは、子どもの〈心と身体に働きかける遊び〉でした。この〈心と身体に働きかける遊び〉とは、身体を動かす遊び、子どもとスキンシップを図る遊び、子どもの緊張をほぐす遊び、感覚刺激を提供する遊び、子どもの笑顔を引き出す遊び、きょうだいと一緒に遊ぶ遊びから成り立っていました。

以下に、訪問看護師の語りから抜粋した重症心身障害児に対する遊びを枠内に、続いてその意味について作業療法士、保育士、看護職者と協議した内容をコメントしています。

1. 身体を動かす遊び

マッサージをしながら体のいがんんでいるところを触って、おなかが張っているのを見てマッサージしたり、冬は足とか冬とか冷えるから、普通にもう「ふーっ」とマッサージしながら足の裏をこそばせてみたり。マッサージというよりは、**タッチング**みたいな感じ。

この場面では、訪問看護師が**タッチ**や**マッサージ**で子どもに触れています。タッチやマッサージは、子どもにとっての快反応を引き出すことが多く、脳の覚醒状態や自律神経系を整える意味があります。また子どもに触れることは子どもの反応を引き出し、子どもと訪問看護師とのコミュニケーションの基礎にもなります。マッサージは一般的に擦ったりすることが多いですが、時にはゆっくり、押さえるようにすることも取り入れると子どもは落ち着くことがあります。一般に、素早い・抹消から中枢にむけてのマッサージは自律神経系を興奮状態に、ゆっくり・圧迫を加えながらの中枢から抹消にむけてのマッサージは自律神経系を鎮静化させる役割があります。

子どもの両手を持って、「はい、これ〇〇ちゃんのお目め、これ〇〇ちゃんのほっぺ、はい、これお口はい、これ、何だー？」と**子どもの目、頬、口に触れさせる**。

この場面では、訪問看護師が自ら手を伸ばしたり、掴んだりすることができない子どもに対して、自分の体に触れる経験をしてもらうことにより、**子どもが自身の体を認識できる**という意味があります(**ダブルタッチ**)。また、子ども自身の手で顔に触れるという行為は、子どもの身体の位置を正中で安定させることにより、子どもの心身が落ち着く効果があります。



5. 子どもの笑顔を引き出す遊び

マッサージしながら、リズムをとりながらアンパンマンの歌と一緒に歌う、チューリップの歌の時は、いっぱい手を動かしながら歌う。

この場面で訪問看護師は、子どもとリズムを取って歌うことにより、子どもに“ゆれ”をもたらし、子どもの覚醒レベルを調整しています。また訪問看護師が、チューリップの歌の時は常に手遊びをするというように、ある音楽に対しては、常に同じ遊びをするという因果の関係を繰り返すことにより、子どもはチューリップの歌が鳴ると、手遊びをすることを予測するようになります。

- 「一緒に歌を歌おう」って、訪問看護師が手を置くと、子どもが左手でパーンパーンって、子どもが手拍子を取ってくれるようになったので、「一緒に歌えるね」って声をかける。
- どうせ歌えないから訪問看護師だけが歌うわっていうのではなくて、普通の子どもと歌うような。「歌うから一緒に歌えたら声出してもいいよ」って子どもに声をかける。

この場面で訪問看護師は、子どもと一緒に手拍子でリズムを取る、一緒に歌おうと声をかけるなど、子どもに対する一方通行の関わりではなく、一緒に歌う関わりをしています。

また子どもの腕に少し動かすだけですぐ鳴るような鈴をつけると、子どもが腕を動かして手拍子をする度に鈴を鳴らすことができるので、子どもの笑顔をさらに引き出すことができますといえます。



ぬいぐるみを使って「〇〇ちゃん、こんにちは」と声を変えて話しかける。「よかったね、今日、友達と遊びに来てくれた。」手を「握手」とか言って（子どもの手を握る）。

この場面で訪問看護師は、ぬいぐるみを用いて話しかけることにより、訪問看護師とは違うもう一人の別の人物を演じており、子ども同士で集って遊ぶ経験が少ない子どもに対して、集団としての関わりを演出しています。また、ぬいぐるみの手と子どもの手に柔らかい紐の端をそれぞれを持ってもらい綱引き勝負を楽しむこともできます。

V. 子どものサインの読み取り

訪問看護師は、重症心身障害児と遊びながら、身体の動き、身体の緊張のほぐれ、表情の変化から、子どもが出すサインの意味や子どもの気持ちを読み取っていました。また子どもに現れる変化が乏しくても、子どもから感じる反応を読み取っていました。

以下に、訪問看護師の語りから抜粋した重症心身障害児のサインの読み取りを枠内に、続いてその意味について作業療法士、保育士、看護職者と協議した内容を、コメントしています。

1. 子どもの身体の動きの読み取り

- ・訪問看護師がボールを投げると、ぴくっと少し子どもの手が動いたので、訪問看護師は、子どもの反射的な動きなのか、もしかして子どもがボールを返そうと思ったのか、何か飛んできたからよけようと思ったのかと読み取った。また、手が動くという反応があるので、ボールが来るということ子どもが目できちんと追っていると読み取った。
- ・訪問看護師が「今日はこれでおやつ終わり」って言うと、子どもは「んー」って言って怒って、渡したタオルをパーンっとはたいて投げるので、訪問看護師は、子どもがまだおやつを食べたいと読み取った。
- ・訪問看護師が子どもの好きな音楽を流して一緒に抱っこして踊ると、すごく嬉しそうに、音楽がなると同時ぐらいに、足をパタパタパタパタっという仕草がみられるので、訪問看護師は、子どもが手足の動きで喜びを表現していると読み取った。

これらの場面では、訪問看護師が、迷いながらも子どもが示す反応の意味を読み取ろうとしています。子どもの反応を読み取る際には、その反応が随意的なものか反射的なものであるかを考えます。子どもの反応を、子どもが意思を持って手を動かそうとしていると肯定的に解釈する姿勢を持ち、その解釈に満足しないで、子どもの反応を適切に読み取れているかという疑問を持ちながら繰り返し刺激を提供して確認し続けることが、子どもとつながり関係を築く基礎となります。

事例のように子どもが怒る、喜ぶことは、子どもが訪問看護師に対して快、不快という意思表示をしていたと肯定的に解釈することができます。また訪問看護師も、日ごろの関わりから子どもの感情を解釈できていると言えます。このような場合、子どもに対して、「楽しいんだね。」「怒っているんだね。」と解釈した子どもの感情を子どもに問いかけ、確認していくことが大切です。

また 3 例目の事例は、子どもは音楽という感覚刺激（聴覚）が提供されることを通して、結果として子どもが足を動かす（体を動かす感覚）という因果の関係がもたらされています。

1. 子どもの体調、興味に応じた遊びの選択と調整

訪問看護師は、絵本の読み聞かせだけで1時間過ごすのではなく、訪問時間中の遊びに、静と動の取り入れという選択と調整をしていた。体をマッサージで動かした後は絵本を読むという選択をしていました。

この場面では訪問看護師が、遊びに静と動を取り入れていることにより、子どもに与える感覚刺激に On と Off が取り入れられています。この感覚刺激の On と Off の提供を繰り返すことで、子どもの反応をより引き出すことができます。



Ⅶ. 母親と子どもとのつながりをつくるコミュニケーション技術

今回の調査結果から、遊びを通した小児訪問看護実践の中には、**母親やきょうだいの思いに応える、母子相互作用を引き出す、母親と子どもの情報を共有する、子どもの反応に溶け込んでいく、母親とのつながりをつくる**という5つのコミュニケーション技術があることがわかりました。以下に、訪問看護の実践場面を一部抜粋した内容を枠内に、続いてコミュニケーション技術をテーマに、重症心身障害児者病棟に勤務する看護師を中心に看護職者で協議した内容をコメントしました。

1. 母親やきょうだいの思いに応える

訪問看護師は、母親とのコミュニケーションの中から、訪問看護に対するニーズや「他の人に触ってもらえない」「抱っこしてもらえない」といった母親の子どもに対する思いを汲み取り、子どもの頭や身体を撫でたり、手を握ったり、ストレッチや抱っこをしていました。また、訪問看護師は、訪問中のきょうだいの対象児に接する様子や、母親の「きょうだいにはさみしい思いをさせている」といった言動などからきょうだいの思いを汲み取り、きょうだいも遊びの場面に加えて、一緒に時間を過ごしていました。

医療的な行為はほとんどお母さんがマスターしていたので、ほとんど**遊びとか、ストレッチとか**がメイン。お母さんが違う人と接して楽しんでもらいたいということをメインに置かれていたので、医療行為というよりは遊びとかをメインでかかわっていました。

この場面では、訪問看護師が家族の訪問看護に対する意向を、子どもとの遊びとして取り入れています。家族は障がいがあっても一人の“子ども”として大切にかかわってくれることを望んでいます。遊びは子どもにとって欠かせないものですが、この事例のように子どもを抱っこしたり、触ったりすることは、**子どもを“一人の大切な存在”と認識していること**であり、母親に子育ての実感をもたらすものといえます。



上の子どもさんも一緒になって話したり、そうになったらやっぱりきょうだいの声ってすごい反応するんです。

この場面では、訪問看護師がきょうだいに示している**子どもの反応のちがいを**読み取っています。きょうだいは家族の中でも特別な存在であり、きょうだいにも一緒に遊びに加わってもらうことにより、きょうだいの絆を深めることを支え、きょうだいへの直接的ケアにもなります。きょうだいが遊びのバリエーションを沢山持っていることもありますし、子どものことをよく知っているので、**きょうだいの気持ちも確かめながら遊びに誘って**みてください。